

# ピア・ラーニングの概念を取り入れたスピーチコンテストの試み

## ——重慶大学での実践報告——

藤田 朋 世\*

フランプ 順 美\*\*

キーワード：ピア・ラーニング，スピーチコンテスト，自律学習，学年を超えたつながり，モチベーション

### 要 旨

本稿は、2007年12月に中国・重慶大学日本語科で開催された「グループ・スピーチコンテスト」について報告し、ピア・ラーニングの概念を取り入れたスピーチコンテストの可能性について述べるものである。

本稿で報告する「グループ・スピーチコンテスト」は、教師が一切介入せず、学生間の協働によってスピーチ原稿の執筆から発表までを準備するという形式で行われた。開催の発端は、当時の重慶大学日本語科で、①教師主導から学習者中心の学習体制へ変えていくこと、②他の学年の学生との交流により日本語レベルの向上を目指すこと（「学年を超えたつながり」の創造）の必要性が感じられたことにある。これらの目的を達成するため、本実践ではピア・ラーニングの概念を取り入れ、さらに、1, 2年生または3, 4年生の学生混合のグループで行うという形式のスピーチコンテストを試みた。

スピーチコンテストの後、参加者にアンケートを行い、どのように準備をしたか、グループ内で問題はあったか、コンテスト後にどのような変化があったかなどを聞いた。その回答から、学生同士で意見交換を行ったり、文法、表現、スピーチの指導をし合ったりするなど、協力し合って準備をしていたことがわかった。また、グループ活動を通じ、他の学生と知識を共有することで新しいことを発見できた喜び、同じ目標に向かって協力することで達成感を感じたという意見が多く聞かれた。そして、その達成感が「日本語が上達した」という実感につながったこともアンケートの結果からうかがわれた。さらに、コンテスト終了後も他の学年の学生との交流が続いていることや、学習方法が変化したことなどがアンケートでは報告された。一方で、グループ活動がうまく機能しなかったグループもあり、今後の課題としては、グループで行う目的を十分に説明することや、普段の授業から学生主体の活動やグループ活動を取り入れることが挙げられる。

\*FUJITA Tomoyo：東京日本語教育センター非常勤講師

\*\*FRUMP Naomi：上海大学外国語学部日本語科日本語講師

## 1. はじめに

日本語学習者による日本語スピーチコンテストは日本国内外で日々行われている。通常のコンテストでは参加者の学生が一人で準備をし、それに教師が指導をしていくものであろう。しかし、今回重慶大学では1, 2年生または3, 4年生の学生混合のグループで行う「グループ・スピーチコンテスト」を開催した。これは、教師が介入せずグループの学習者間の協働によってすべて行うという形式である。それでは、なぜグループ・スピーチコンテストが必要だったのだろうか。主な理由として以下の2点が挙げられる。

まず第一に、教師主導から学習者中心の学習体制へ変えていくことである。当時の重慶大学は日本語学習者130名に対し日本人教師は2名だけという状況にあり、従来の教師主導の学習体制には限界があると思われた。重慶は北京や上海のような都市とは違い、日本人の数が非常に少なく、日本人を通して日本語を学べる環境であるとはいえない。そこで、学習者同士がお互いに協力し合い、意見の交換や、日本語の指導をしていけるような学習環境に変えていく必要があった。

第二に、他の学年の学生との交流により、日本語レベルの向上を目指すことである。学生達はそれまで同学年との交流はあったが、他の学年の学生との交流は非常に少なかった。違う学年、特に4年生の中には日本語レベルが非常に高い学生がおり、そういった学生達と日本語レベルが低い学生達が交流することで、日本語科全体の日本語レベルが向上するのではないかと考えた。当時、重慶大学の学生は教師中心の授業体制に慣れきっており、どちらかと言えば、ピア(peer = 仲間)同士で指導し合うよりも教師からの指導を好む傾向があった。そこで、先輩から後輩への指導という形であれば、学生達の日本語レベルも向上すると同時に、違う学年同士の交流も可能になるのではないかと考えたのである。

以上の理由から、「教師主導」から「学習者中心」へ、「横のつながり」から「学年を超えたつながり」への変化を実現するために、新しい学習方法の提案として、ピア・ラーニングという概念を取り入れた「グループ・スピーチコンテスト」が実施された。

本稿では、2007年12月に重慶大学日本語科で行われた「グループ・スピーチコンテスト」の実践報告をし、スピーチコンテスト後に行ったアンケートに基づき、ピア・ラーニングの概念を取り入れたスピーチコンテストの可能性を述べていきたい。

## 2. ピア・ラーニングと日本語教育

近年、ピア・ラーニングを用いた新しい日本語学習が注目されている。ピア・ラーニングとは、言葉を媒介とし、学習者同士が協力して学習課題を遂行していく方法である。このピア・ラーニングが目指すものは、他者と学習過程を共有することにより、日本語レベルを向上させる

とともに、最終的には自分自身を発見し、自立的な学び手となることである（池田・館岡 2007）。具体的には、作文の推敲のために学習者同士がお互いの書いたものを検討するピア・レスポンスや、学習者同士で読みの過程を共有するピア・リーディングなどといった形で実践されている。

池田・館岡（2007）はピア・ラーニングのメリットとして「リソースの増大」、「相互作用による理解深化」、「社会的関係性の構築と学習への動機づけ」の3点を挙げている。

まず、「リソースの増大」とは、「集団全体としてより豊かなリソースをもつことができ、限られた時間内で利用可能なリソースが増える」こと、つまり、一人で学習するよりも、限られた時間内で豊かな情報知識が得られるということである（池田・館岡，2007：53）。学習者はお互いに「不足していた知識や方略を仲間の学習者から得」ることができ、さらに、それは「教師からは決して得られないであろう知識」でもあるという（池田・館岡，2007：53）。第二に、「相互作用による理解深化」、つまり、相互作用によって「互いの理解を深めたり、考え方を柔軟させたり、また、新しいものを生み出したりする」ことが可能となるというメリットがある（池田・館岡，2007：54）。他の学習者との協働作業においては、「自分の理解や意見を他者にわかるように発信し」たり、「仲間から質問やコメントを受け、それに答え」たりしなければならない（池田・館岡，2007：54-55）。それは、自分の意見を見直し、再整理をするいい機会となるという。第三のメリットは、「社会的関係性の構築と学習への動機づけ」、つまり、「他者との関係をどのように構築していくか」を学べること、協働作業の達成感や楽しさが日本語学習へのやる気へつながることであるという（池田・館岡，2007：56-57）。仲間との協働作業は、「他者の意見を尊重し受容する中で、互いに協力し合い、ある目標に向かうことは大きな達成感をもたらす」とし、この達成感が、日本語学習へのやる気につながっていく（池田・館岡，2007：56）。

以上のようなピア・ラーニングの概念に基づき、ピア・レスポンス（池田・館岡 2007；田中 2006 など）やピア・リーディング（館岡 2003，2006 など）の実践が報告されているが、以上のピア・ラーニングの実践は、同一クラス内、つまり、日本語レベルがほぼ同じ学習者同士の協働活動である。一方、中国人学習者を対象にピア・レスポンスを実施した田中（2006）は、中国人学習者の場合、「教師（または日本語が上手な仲間）に教えてもらいたいという意識が強いこと」を指摘している。確かに、重慶大学においても学生達はピアからではなく、教師または日本語レベルが高い学生に指導を受けることを望んでいた。しかし、実際には、日本語レベルが高い学生がレベルの低い学生に対して日本語の指導をするという姿勢は、見られなかった。

そこで、本実践では、学年混合のグループによりピア・ラーニングの概念を取り入れた活動を行うことを考えた。管見では、ピア・ラーニングのスピーチコンテストへの応用はないが、スピーチコンテストへも応用可能であると考え、協働学習の成果の発表の場として、グループ・スピーチコンテストを開催することにした。

### 3. グループ・スピーチコンテスト概要

グループ・スピーチコンテストの目的,開催までの日程,およびコンテストのルールを説明する。

#### 3-1. スピーチコンテストの目的

第1章でも述べたとおり,本スピーチコンテストの目的は,「学習者中心」の学習体制の提案と「横のつながり」から「学年を超えたつながり」への変化を実現することである。

当時の重慶大学の学生には,問題に直面した際,自ら解決しよう,考えてみようという姿勢が見られず,教師にその答えを求めることが多かった。このような学生達の受身的な学習態度に対して限界を感じ,学習者間で学びあえる学習体制や,問題に直面した際に自ら調べ解決していくという自律学習の方法を身につけさせることが必要だと考えた。また,その方法を知ることで,将来,教師の助けなしでも勉強ができるような日本語の生涯学習へと繋がっていくのではないだろうか。

さらに,他の学年の学生との交流を促進することで,日本語レベルの向上を目指した。前述のように,当時の4年生の中には日本語レベルが非常に高い学生が多く,そういった学生達と日本語レベルが低い学生達が交流すれば,学部全体の日本語レベルが高められるのではないかと考えたのである。

なお,重慶大学では,通常1学期に一回はスピーチコンテストを行っており,今回もその一環として行われた。しかし,今回に限っては,上記のような必要性を感じたことと,新しい試みが多くの学生達にコンテストへの参加意識を引き起こすのではないかということから,グループ形式をとったのである。このコンテストは学部内のイベントであるため,コンテストの結果は,一切成績には関係しないこととした。

#### 3-2. 日 程

グループ・スピーチコンテストの告知から当日までは,次のような日程で進められた。

|                 |   |
|-----------------|---|
| 2007年<br>11月15日 | 日本語科の学生が発行している「日本語新聞」にてグループ・スピーチコンテストを告知            |
| 11月19日・20日      | ルール説明会  |
| 11月23日          | 参加者応募締め切り (1,2年混合グループ14組42人,3,4年混合グループ5組23人が参加【注1】) |
| 12月18日          | 原稿提出  |
| 12月20日          | グループ・スピーチコンテスト開催 (1,2年生の部・3,4年生の部)                  |

### 3-3. ルール

スピーチのテーマは「中日交流—日本語を学ぶ私たちができること」で、グループのメンバーの一人が4分のスピーチを行った。その後、スピーチの内容に関し、審査員から質問を受けた。これにはグループのメンバーの誰が答えてもよかった。

#### 3-3-1. グループ結成

各グループは3人以上5人以内で、グループの中に必ず違う学年の学生をいれることとした。つまり、1, 2年生のグループには1年生と2年生, 3, 4年生のグループには3年生と4年生がいなければならない。ここで、なぜ1年生と2年生, 3年生と4年生というグループにしたかと言えば、重慶大学には複数のキャンパスがあるのだが、1, 2年生と3, 4年生は異なるキャンパス（キャンパス間移動はバスで30分以上かかる）で生活しており、準備の便宜性を考えたからである。

#### 3-3-2. 練習

先に述べたとおり、教師は学生たちの練習に一切介入せず、原稿書き、練習はすべてグループのメンバーで協力して行わなければならなかった。毎週一回行われる日本語コーナー【注2】にメンバー全員が集まり、最低30分間練習することを義務付けた。

#### 3-3-3. 審査方法

審査は7名（中国人5名、日本人2名）の日本語科の教師が点数制で行った。「内容」、「文法の正確さ」、「発音・アクセント」、「表現力」、「質問への回答」を各10点とし、合計50点を満点とした。

#### 3-3-4. 教師及び学生の評価

フィードバックは、直接各グループに対して行うことはしなかった。しかし、結果発表時に、スピーチの内容、グループ活動の成果について、審査員の中国人教師、日本人教師それぞれ1名から評価を述べた。コンテストに参加した学生に対しては、コンテスト終了後、無記名によるアンケート調査を行い、グループ活動の振り返りや自己評価について記述してもらった。

## 4. アンケート調査

学生へのアンケートでは、「グループの人とどのようにスピーチの準備（原稿作成や練習）を

したか」、「準備中に何か問題があったか。あったら、どのように解決したか」、「日本語が上達したと思うか」、「参加してよかったと思うか」、「参加前と後で何か変わったことがあるか」などについての質問をした（詳細は巻末資料を参照のこと）。そして参加者 65 名中 48 名（回収率 73.8%）から回答があった。

## 5. アンケート調査の回答から

### 5-1. スピーチの準備段階について

本実践は学生同士の「協力」が一つのテーマであったが、実際のところ、学生達は一体どのように準備を進めていたのであろうか。

#### 5-1-1. スピーチの準備の仕方

「グループのメンバーとどのようにスピーチの準備（原稿作成や練習）をしましたか。できるだけ詳しく説明してください」という質問に対し、様々な回答が得られた。以下はスピーチ原稿の準備の仕方についてまとめたものである。

- a. グループのメンバーが一人一人原稿を書き、その中から一番良いものを選んだ。
- b. グループのメンバーが一人一人原稿を書き、それぞれのいいところを組み合わせ一つ原稿を完成させた。
- c. 内容について話し合った後、グループ全員で分担して書き、一つ原稿を完成させた。
- d. 内容について話し合った後、発表者を決め、発表者が原稿を書いた。
- e. 内容について話し合った後、発表者を決め、発表者以外が原稿を書いた。
- f. 発表希望者が原稿を書き、グループ内で選考を行った。

このように、スピーチ原稿の準備の仕方はグループによって異なっていた。準備方法について教師が特別指示しなかったとはいえ、このように様々な方法がとられたことは非常に興味深い。どの方法においても他のメンバーとの話し合いや訂正が取り入れられており、グループ内でそれぞれが協力して準備することができたとと言える。しかし、少数派（8%、48名中4名）ではあるが「発表者が一人で原稿を完成させ、他のメンバーは何もしなかった」という残念な回答もあった。

#### 5-1-2. 準備段階での問題

前節で述べたように、学生達は様々な形で協力し合いながら準備を進めていた。一方で、「準備中に何か問題がありましたか。あったら、どのように解決しましたか」という質問に対して

は、61.7% (29名) の学生が練習段階で「問題があった」と答えていた。具体的に、どのような問題があったかを自由に書いてもらったが、主なものを以下に挙げる。

〈スピーチ原稿の内容に関するもの〉

- 原稿に特徴がない。
- 内容が薄い。
- 内容がたくさんあって、どれを選んだらいいか難しかった。
- 他のグループとは違う新しい視点が考えだせなかった。
- 原稿に説得力があるか、聴衆が発表者の本当に言いたいことを理解できるかが不安だった。

〈考えの違いに関するもの〉

- スピーチの内容に関して、なかなか意見が一致しなかった。
- 皆の考えの深さが違った。

〈日本語に関するもの〉

- 原稿作成のとき文法の間違いが多かった。
- 語彙、表現など思うようにうまくいかなかった。
- いいアイデアが出て、それを私たちの日本語能力で表現するのはとても無理だった。
- 中国語から日本語に訳すときに、正しい表現かどうか分らなかった。

〈準備時間に関するもの〉

- 発表までの時間が少なかったため、あまり練習する時間がなかった。
- 準備時間が少なかったので、他のメンバーが書き直した原稿を暗誦することは発表者にとっては難しかったようだ。

他にも、「参加意欲の低いメンバーがいた」、「テーマについての情報をどこで見つけたらいいかわからなかった」などの問題があったことが報告された。

では、以上の問題を学生達はどのように解決したのだろうか。「スピーチ原稿の内容」、「日本語」に関するものは、「先輩に留学経験の話聞いて、何回も書き直した」、「先輩のアドバイスに従って訂正した」、「先輩に聞いて、解決した」など、先輩が後輩へ指導することで問題を解決しているグループが多かった。また、「皆で資料を調べて話しあったので解決できた」、「皆で一緒に検討し、間違いを訂正した」など、仲間同士の話し合いによって問題を解決したグループもあった。また、「考えの違い」に関する問題はグループ活動ゆえに生じる問題であるが、これに

関しては、「話し合った」、「皆で相談し、とことん討論をした」、「他の人の意見もいいところは取り入れた」など、お互いの意見の相違から新しいものを生み出すための話し合いが行われていたようだ。

以上のように、学生達は何か問題があったとしても、教師に頼ることなく、グループのメンバー同士で協力して解決しようとした。このことから、今回のグループ・スピーチコンテストの目的の一つである、学習者同士がお互いに協力し合い、日本語の指導をしていける学習環境の創造という目的が達成されたと言えるのではないか。

## 5.2. グループ・スピーチコンテスト後の変化

グループ・スピーチコンテストに参加したことで、学生達の日本語レベル、違う学年の学生との交流、日本語の学習方法などにどんな変化があったのだろうか。

### 5-2-1. 日本語レベルの変化

「グループ・スピーチコンテストに参加して、日本語が上達した（上手になった）と思いますか」という質問に対し、「思う」と答えた学生は73%（35名）、「思わない」と答えた学生は27%（13名）であった。このことから、半分以上の学生が今回のスピーチコンテストに参加し、日本語が上達したとと思っていることが分かる。学年混合のグループであったがゆえに、特に日本語レベルが高い学生から低い学生へ日本語の指導が行われ、このように感じた学生が多かったことがアンケートの回答からはうかがわれた。以下が学生の主な回答である。

- 原稿を書き終わってから、先輩が発音を一つずつ教えてくれた。
- 先輩からいい原稿の書き方を学んだ。
- 先輩からスピーチの表現力や、マナーを勉強した。
- いろいろ分からなかった表現や文法を身につけることができた。

さらに、日本語レベルが高い学生達からは、今回のコンテストに参加し「後輩に指導することで、自分の勉強になった」、「人にどう指導したらいいかが分かった」、また「人を説得させるために自分の意見を言うだけでなく、他人の意見や考えもちゃんと聞けるようになった」など、日本語以外の部分での成長ができたというコメントも見られた。

同じ質問について、発表者の学生（図1-1）と発表者以外の学生（図1-2）の回答を比較してみると次のようになった。

図1から、「日本語が上達したと思う」と答えた発表者の学生は83%（12名中10名）、発表者以外の学生は69%（36名中25名）であった。一方、発表者以外の学生の約30%が「思わない」



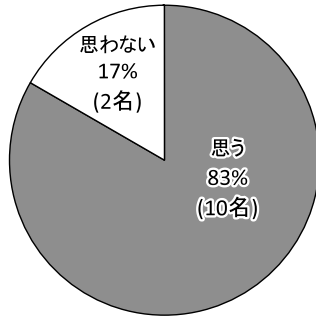


図 1-1 発表者の学生

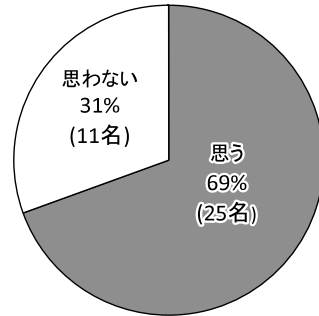


図 1-2 発表者以外の学生

図 1 「グループ・スピーチコンテストに参加して日本語が上達したと思うか」

と答えていた。その主な原因として、次の2点が挙げられる。

第一に、発表者以外の学生のコンテストへの参加意識である。発表者でないため「スピーチの練習にあまり参加しなかった」や「発表者が書いた原稿を最後に読んだだけだった」と答えた学生は、当然のことながら、「日本語が上達したと思わない」と答えていた。これらのコメントは特に1, 2年生の混合グループの学生に多く見られた。これはグループ活動の意義が理解されていなかったことの他に、3-3-1章でも述べたように、1, 2年生と3, 4年生のキャンパスが離れているため、3, 4年生と同じキャンパスに住む教師達が1, 2年生の練習状況を把握できなかったからだと考えられる。

第二に、学生の日本語学習観がある。アンケートの回答の中に「このような形式のスピーチコンテストは確かに発表者がとても勉強になりましたけど、グループのほかの人にとっては、効果はちょっと……」という意見があった。つまり、スピーチの準備より、コンテストでスピーチをすることのほうが日本語の上達に役立つという学習観が学生の中にあったと言える。

このように、グループのメンバーが協力してスピーチを作り上げなければならないというコンテストの主旨、及びグループ活動の意義が学生全員によく理解されていなかったことから、約3割の学生が「日本語が上達しなかった」と感じたのではないだろうか。

しかし、一方で、発表者以外の学生でも約7割(36名中25名)が「日本語が上達したと思う」と答えていたことは、特筆すべきことだろう。学生のアンケートには「グループのメンバーとの話し合いや、資料を調べていて、新しい考えに触れることができ勉強になった」、「メンバーが書いた上手な原稿を読むだけでも、とても勉強になった」などの理由が述べられていた。他のメンバーとの協働作業だからこそ豊かな発想、考えを生みだせるという発見ができたこと、メンバー同士が「お互いに不足した知識や方略を仲間の学習者から得る」(池田・館岡 2007)ことができたことで、発表者でなくとも、このような充足感が得られたのではないだろうか。

### 5-2-2. 違う学年の学生との交流

「グループ・スピーチコンテストに参加して、違う学年の学生と交流するようになりましたか」という質問には、「なった」と答えた学生が79% (38名) にものぼった。一方、「ならなかった」と答えた学生は21% (10名) だった。また、「交流するようになった」と答えていた学生のほとんどが、スピーチコンテストに参加して「日本語が上達した」と答えていた。これはスピーチ準備期間中にグループのメンバー同士がお互いに協力し合い、同じ目標に向かってがんばったという達成感が、日本語が上達したという実感にもつながったのではないだろうか。

学生のコメントを学年別で見ると、1, 2年生の混合グループでは、メンバー同士で、資料集めや原稿作成などをしたことで「違う学年に新しい友達ができうれしい」や「先輩と友達になれてよかった」という回答が多く、3, 4年生の混合グループの学生では、「卒業後の進路などの相談をしている」などのコメントが聞かれた。このように、今回のグループ・スピーチコンテストのテーマの一つである「学年を超えた交流」が行われはじめたことは、喜ばしいことであるといえよう。

### 5-2-3. 学習方法の変化

今回のグループ・スピーチコンテストは、グループの学習者間の協働によってすべてを行うという規則であったが、この活動は、参加した学生達の学習態度にどんな影響を与えたのだろうか。

アンケートの回答では、スピーチコンテスト後、「分からないことがあるときの調べ方が分かった」、「本や辞書を調べるだけでなく、友達と話し合うことを身につけた」など、今回のスピーチコンテストによって、教師だけに頼る学習方法から、自ら文献で調べてみたり、周りの友人、先輩など他の人の意見を参考にし、再考してみたりするという方法を身につけられたことが報告されている。このことは、これから大学を卒業し、生涯自分で日本語を学んでいく上でも大切なことであろう。

さらに、グループ活動で様々な意見、異なる意見に触れた学生達からは、「日本のことについて、まだまだ知らないことがあることに気がついた」ため、「今、日本についていろいろな本を読んでいる」などの報告が聞かれた。教科書だけの学習から、自ら日本について知ろう、調べようという姿勢へ繋がったことは、大きな学習方法の変化といえるのではないだろうか。

### 5.3. グループ・スピーチコンテストについての感想

今回のグループ・スピーチコンテストに参加した学生からは、日本語レベルの向上のほかにも多くのプラス意見が聞かれた。以下に主なものを挙げる。

- みんなで準備ができて楽しかった。

- それぞれの意見が違うためグループで意見交換をすることで、発想がより豊かになった。
- グループ形式のほうが、発表内容が豊かになっていい。
- みんなで準備したり、話し合ったりするのが楽しかった。
- グループで目標に向かってがんばれてうれしかった。
- グループのメンバーと一緒にできるので、コンテストに参加するのも怖くなかった。
- 今回は協力者として参加したが、発表する人のスピーチを聞いて、今度は自分も発表したくなった。
- 今回のスピーチコンテストは形式が今までとは違ってとてもいいと思う。

このように、グループ活動だったからこそ、達成感や協働学習の楽しさを味わえた学生が多かったようだ。さらに、練習段階で、自分の日本語の学習経験、または留学体験などを他の学生に話し、それが受け入れられたことへのうれしさを挙げていた学生も少なくなかった。また、今回は協力者として参加したが、次回は発表者として参加しようという自信が得られた学生や、今までとは異なる形式のスピーチコンテストに好奇心を駆られた学生も少なくなかったようだ。

以上のように、スピーチコンテストについて多くのプラス意見が聞かれた一方、マイナス意見も挙げられた。以下が参加した学生からのマイナス意見である。

- 人数が多すぎると意見交換など複雑になりすぎて、意見がまとまりにくい。(4人のグループ)
- あまり協力してくれない人もいた。
- グループの分け方に問題がある。お互いにあまりよく知らないため、意見を言ったりするのに少々不便さを感じた。もっと自由に分けたほうがいいと思う。
- ちょっと不公平だと思う。一人だけ(発表者)がよく出来れば、優勝できる。しかし、他のグループのメンバーは全く話していないのに、それでも優勝となる。一方グループの全員が話したのに、特によく話せた人がいないから優勝できない。
- 違う学年の学生と交流が出来なかった。
- 準備時間が短すぎて、他の学生と練習する時間が足りなかった。

## 6. 本実践の問題点と今後の課題

参加した学生からの回答、そして企画した教師の反省点を踏まえ、グループ・スピーチコンテストに関する今後の課題について述べていく。今後の課題としては、以下5点が挙げられる。

### 6-1. グループで行う目的を十分に説明すること

前節でも述べたが、グループゆえの協働作業の難しさをマイナス意見として挙げた学生が多かった。また、5-1-1章で挙げたように「発表者一人が原稿を作成し、他のメンバーはそれを読んだだけだった」という学生もいた。それは、発表者と協力者（発表者以外の学生）の役割について、教師が十分な説明ができなかったからではないか。発表者の役割は明確であるが、協力者はグループ内で何をすればいいのか発見できなかった学生は、グループへの参加方法が分からなかったという可能性が考えられる。グループ・スピーチコンテストが十分な意味を持つためには、スピーチをグループで行う目的とそれぞれの役割を十分に説明することが大切である。また普段の授業の中で簡単なグループ活動の模擬練習をさせるなどして、グループ活動の意義や、グループ内での自分の役割に対する責任などを十分に理解させる必要があるだろう。

### 6-2. 内省活動を取り入れること

池田・舘岡（2007）は「自分の学びを批判的に省察していく内省行為は、極めて重要な、いわば、学習の根幹をなす部分だ」と述べ、学習者は内省を通じ「自分は何を学びたいのか、そのためにはどのように参加すればいいのか、この活動から何をどう学んだのか、次の段階の課題は何かなど」を把握するとしている。前節でも述べたが、グループ内での自分の役割が見つけられなかった学生は主体的に活動に参加できず、そのことが5-3章で挙げたマイナス意見に繋がったと考えられる。しかし、今回のスピーチコンテストの準備の過程で、自分の活動を振り返るための内省活動を取り入れていれば、このような学生も自分の役割を見つけることができ、その後の活動への参加にいい影響をもたらしたのではないか。

### 6-3. 十分な準備期間を確保すること

今回のグループ・スピーチコンテストでは、応募締め切りから発表当日までの期間が1ヶ月を切っていた。しかしながら、学生の回答にもあったように、学生混合のグループであるために、単独参加のスピーチコンテストよりも準備に時間がかかってしまう。したがって、今後グループ・スピーチコンテスト開催の際には、グループ結成から発表当日までに1ヶ月から1ヶ月半位の準備期間を与えるなど、十分な練習時間が取れるように計画する必要があるであろう。

### 6-4. 審査方法の再考

今回のコンテストの採点はコンテスト当日の発表と質疑応答のみが審査対象であった。しかしながら、最終結果に対し、「あまり協力的に準備していなかったグループが賞を取った」との不満も出ていた。したがって、単なる競争であると思われないうえにも、準備段階も審査の対象と

する必要がある。

### 6-5. 今後の授業形式

特に重慶大学の学生は、今まで教師主体の授業が中心であったこともあり、このような学生主体のグループ活動に戸惑った学生も多かったようである。したがって、普段の授業から学生主体の活動やグループ活動を取り入れることで、協働学習の方法、異なる意見に対しての対応の仕方などを指導していく必要がある。

## 7. おわりに

コンテスト終了後に行ったアンケートの中には「このスピーチコンテストに参加して、よかったと思いますか」という設問もあったが、これに対し、90% (43名) が「思う」と答えた。重慶大学の学生にとって、このような教師が一切介入せず、グループの学習者間の協働によって行うスピーチコンテストは初めてであったが、アンケートの回答を見る限り、今回のコンテストは成功のうちに終わったと言えるであろう。

確かに、グループ活動がうまく機能しなかったグループもあり、今後の課題として、グループで行う目的を十分に説明することや、普段の授業から学生主体の活動やグループ活動を取り入れること、準備の過程に内省を取り入れることなどが挙げられる。しかし、アンケートの回答から、学生同士で意見交換を行ったり、文法、表現、スピーチの指導をしあったり等、学習者同士で協力し合ったという報告が得られたことから、このようなグループ形式のスピーチコンテストは、学生同士の学習、つまりピア・ラーニングを促進すると考える。

また、先に述べた通り、「コンテストに参加して日本語が上達したと思うか」という問いに対し、73%の学生が「思う」と答えている。単純に単独参加で行うスピーチコンテストと比較することはできないが、ピア・ラーニングの効果を期待する方法として、今回のようなグループ・スピーチコンテストは有効なのではないだろうか。

### 【注】

1. 今回のスピーチコンテストに参加可能だった学生数は、1年生25名（中高からの既習者）、2年生50名、3年生30名、4年生25名であった。
2. 重慶大学日本語科では、学生の日本語レベルの向上を目的に、週1回2時間程度「日本語コーナー」という活動の時間が設けられている。この時間には、学生主体で自由に日本語を使いゲームやクイズをしたり、雑談したりしている。

## 参 考 文 献

- 池田玲子・館岡洋子 (2007) 『ピア・ラーニング入門—創造的な学びのデザインのために』 ひつじ書房
- 館岡洋子 (2003) 「読解授業における協働的学習」 『東海大学紀要—留学生教育センター』 23
- (2006) 「読解授業における教師主導と協働的学習—2つのアプローチから協働の教室デザインを考える」 『東海大学紀要—留学生教育センター』 26
- 田中信之 (2006) 「中国人学習者を対象としたピア・レスポンス—ビリーフ調査から話し合いの問題点を探る—」 『小出記念日本語教育研究会 論文集』 第14号

## 【巻末資料】

## 第3回日本語スピーチコンテストについてのアンケート

2007年12月20日に行われた第3回日本語スピーチコンテスト（グループ・スピーチコンテスト）について、アンケートにご協力ください。

## \*注意\*

- ※質問は Part1 から Part5 まで、全部で2ページあります。全部の質問に必ず答えてください。
- ※無記名のアンケートですから、思ったことを正直に、遠慮しないで、書いてください。
- ※ [ ] の部分には正確な解答を打ち入れてください。
- ※選択肢の中から選ぶ質問は、当てはまる選択肢を残し、他の選択肢は削除してください。
- ※分からない場合はいつでも質問をしてください。

## ●Part1：あなたのことを教えてください。

- ① 【学年】 → [ ] 年生
- ② 【性別】 → [ ]
- ③ 【日本語学習歴】 → 約 [ ] 年

## ●Part2：あなたのグループのことを教えてください。

- ① あなたのグループは全部で何人でしたか。  
→ [ ] 人【男性 [ ] 人、女性 [ ] 人】
- ② 同じ学年の人と違う学年の人は何人いましたか。  
→ 同じ学年の人 [ ] 人、違う学年の人 [ ] 人
- ③ あなたは発表をしましたか。 →            した            しなかった

## ●Part3：スピーチコンテストの準備期間のことを教えてください。

- ① グループの人とどのようにスピーチの準備（原稿作成や練習）をしましたか。できるだけ

詳しく説明してください。

→

- ② スピーチの準備をしているときに、何か問題がありましたか。

→ あった ・ なかった

- ③ 【②で「あった」と答えた人<sup>だけ</sup>答えてください。】

・それはどんな問題でしたか。

→

・どのようにその問題を解決しましたか。

→

●Part4：スピーチコンテストに参加した後のことを教えてください。

- ① このスピーチコンテストに参加して、日本語が上<sup>じょうたつ</sup>達した（上手になった）と思いますか。

→ 思う ・ 思わない

- ② このスピーチコンテストに参加して、違う学年の人と交流するようになりましたか。

→ なった ・ ならなかった

- ③ その他、このスピーチコンテストに参加する前と参加した後で、何か<sup>へんか</sup>変化したところがありますか。あったら、書いてください。

→ (例) 日本語でわからないことがあったら、先輩に質問するようになった。

- ④ このスピーチコンテストに参加して、よかったと思いますか。

→ 思う ・ 思わない ・ わからない

- ⑤ もしこのような形式のスピーチコンテスト<sup>おこな</sup>が行われたら、また参加したいですか。

→ したい ・ したくない ・ わからない

●Part5：このスピーチコンテストに参加した感想を自由に書いてください。（もし問題点や直したほうがいいところがあったら、ぜひ教えてください。）

全部の質問に答えたかどうか、もう一度確認してから、(教師のメールアドレス)まで送ってください。ご協力ありがとうございました！